



はっ

はあ

はあ



其れは見るもおどましき
巨大な蚯蚓みづなの様であつて
とても『山神』やまがみの御姿とは
思えぬ体ていであつた。



ひっ

ああっ!!

ああ……っ

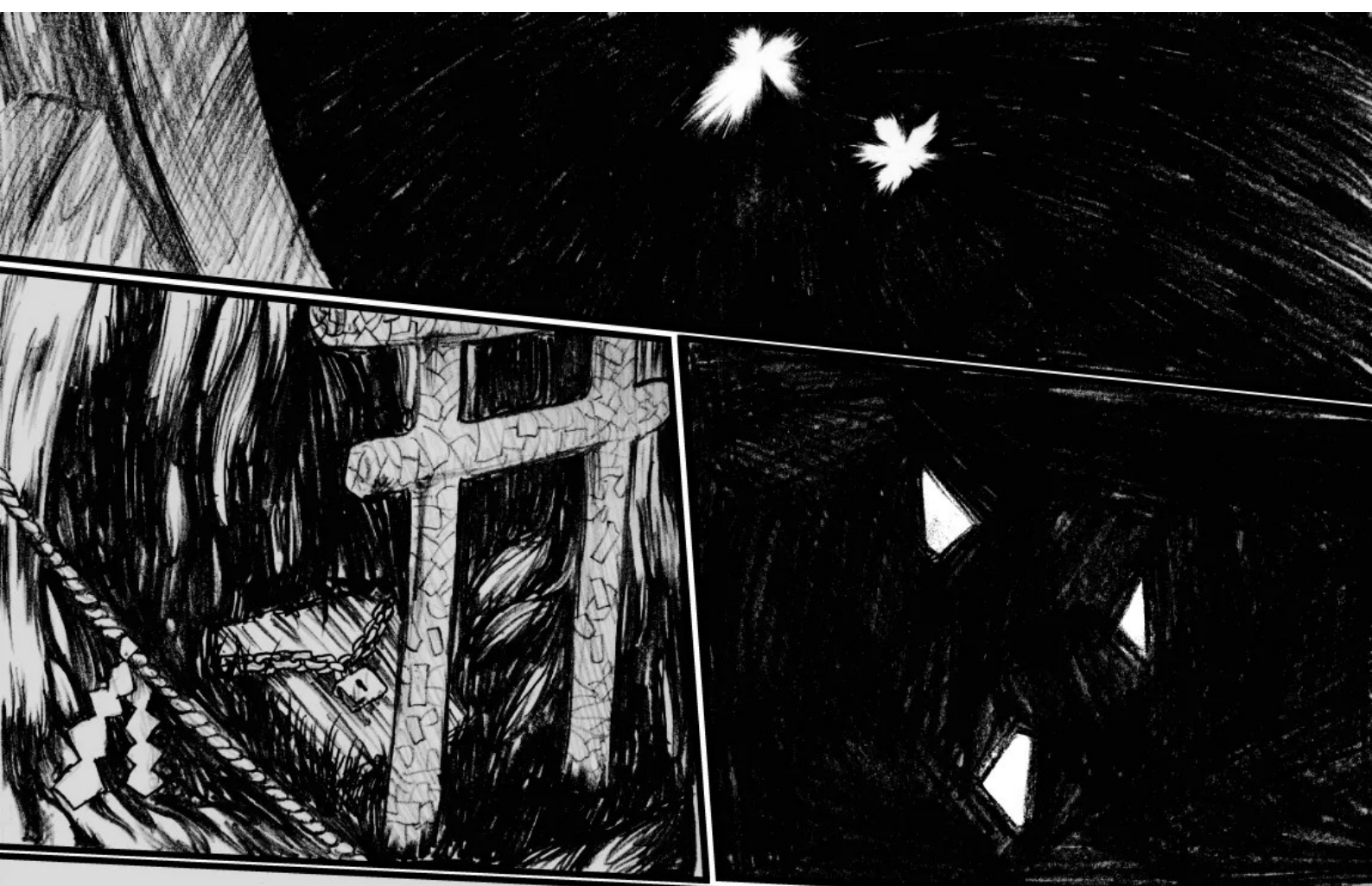
ああ……おやめ……っ
ください……ああっ!!

……っ

マグマの生贄

イケニエ







あっ

因習が罷り通る山村の娘は
その村の業深きさだめによって
『山神』の花嫁となった。
すべては、村に伝わる因果のため。



あううっ



娘には、想い合う
相手があつて





『山神』への勤めが
済めば、夫婦^{めおと}に
なろうと誓っていた。



あっ!?!ぐうっ



『山神』の花嫁はそのまま
召される事は無く、その、
僅かな勤めを過ぎれば
どこかの山に放たれる事を、
二人は識っていた。

ただし村の者が「花嫁」と
結ばれる事は、その村の
因習の『禁忌』とされ、故に、
二人はこの儀が済めば
村を離れどこか遠くの地で
一緒になる事を、互いに
約束していたのである。





そ、そんな……

む、無理でございますっ
後生ですから……ああっ

だが、そんな心と
裏腹に、娘の身体は
熱く火照っていた。

ひっ

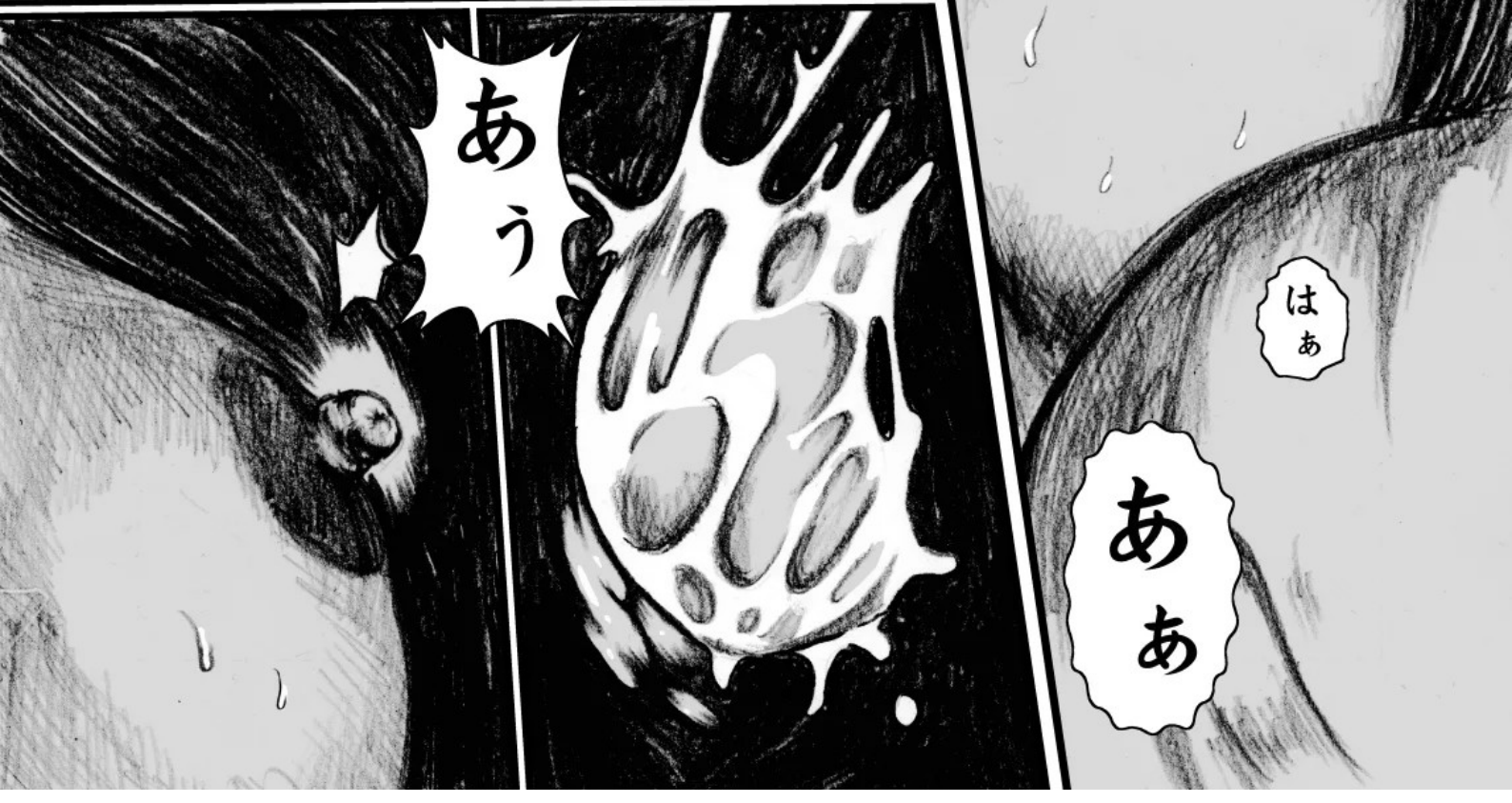
はあ

はっ

あ

はあ

ああ



あう



獣の臭いが立ち込める中、
僅かに分け挿った「それ」は
確かにそれ以上娘の中へは
入れそうには無かった。

い、痛いっ

だが……



ひっ!!

あっ!?

押し広げられた女陰で
蠢く「快樂」に娘は戸惑い、
身体をくねらせ身悶えした。



「それ」の次の狙いを
悟った娘は、だんだんと
大きくなるうねりの中で
驚き、そして怯えた。



あ

ああ……っ





ひあっ!?

舐め取り、
しごく様に
「それら」は
娘の陰核^{クリトリス}に
絡みつく。



……っ

……っ

……!!



ああうっ!!

い、いっ!!

「それら」は娘の
反応を嘲笑うかの
ように、乳飲み児の
様に娘の敏感な
部分を吸い上げた。

身体の中と外、両方の
快楽に耐え切れず娘が、
弓なりに若い身体を
尻目に、「それら」は娘の
鼻腔や耳穴にまで侵入し、
娘の脳を掻き乱した。

あ
!!

ひ
っ
!!

あ
っ

!!



「それ」の形状が
細く尖っていくのを
娘は感じた。



そして……



んぐっ!!

っ!!

ひい



あ

山育ちで鍛えられた娘の脹脛よりも、太く逞しい「それ」を、遂に娘の女陰は迎え入れた。狂おしい程の圧迫感、そして身体の深奥を貫く感覚を、しかし娘の身体は快楽として受け入れ、戦慄いだ。

ふ、太いっ
ああ……



……っ

……

女陰も陰核も鼻腔も
耳穴も口腔も、そして
子宮をも犯される快感に、
娘は悦楽の先の『死』を
予感した。



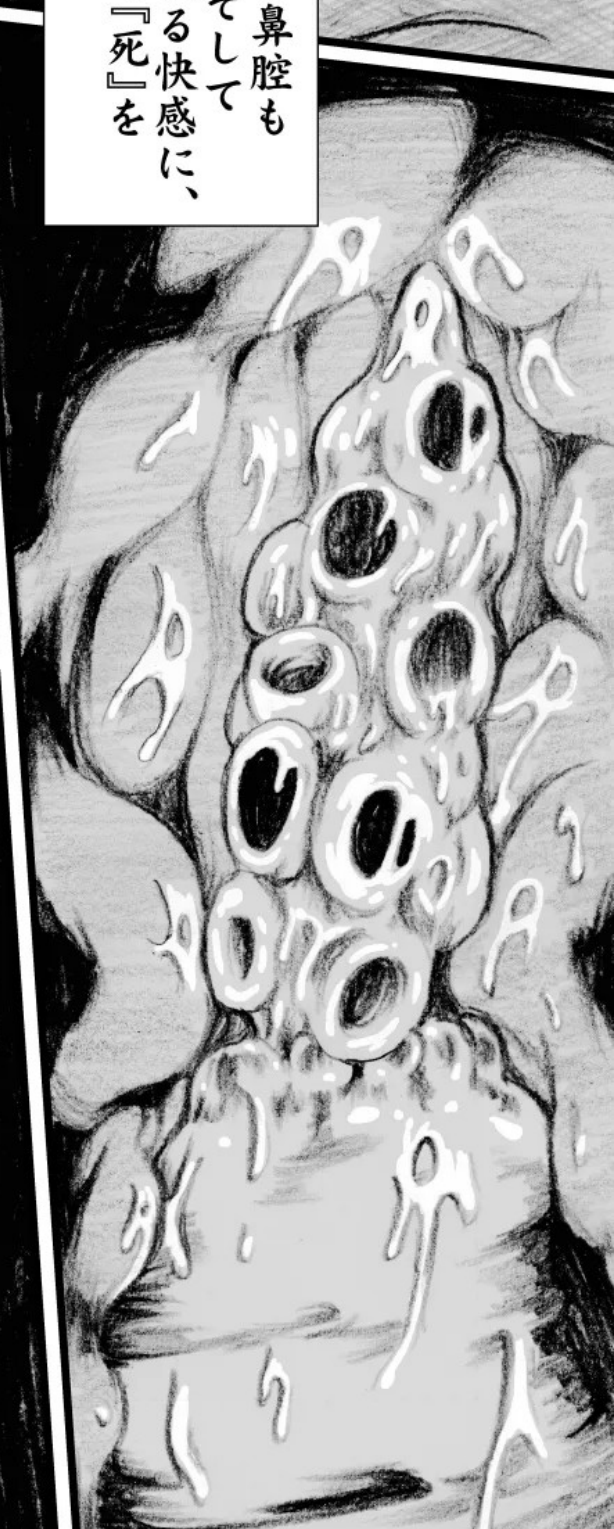
だが……それは
まだほんのさわりで
あった事を娘は思い知る。



んんーっ!!!



う……う



娘の子宮の中で「それら」は一気に弾け、飛び散った。

あうっ!?

.....

.....ひあっ!!

最早言葉にもならぬ強烈な感覚に、娘は数秒のうちに何度も絶頂に達し続けた。

んぐう

.....っ

.....っ!!

.....



「子種」を吐き出すとそれは
直ぐに抜かれ、休む間も無く
次の「それ」が、抜きさった娘の
深奥へと一気に突き込まれた。

んひいっ!!

絶頂は数秒の間断も無く
巨大な電撃のうねりとなって
娘の「女」を襲いつづける。

あ

あ

あ

……っ!!



今や声も出ず、抗う事も
いや、それ以前に動く事すら、
娘には出来なくなっていた。
只、絶え間なく体内で破裂
し続ける狂気の快楽で膨らむ
身体をひくつかせるだけの、
横たわる物体となっていた。

あ

っ

連続し、その度に
強くなる快楽は、ある種
最早苦痛でしかない。
ただただ、数秒おきに
襲ってくる快楽に悶え、
耐えるだけの……。

だが『山神』は延々と
娘を責め続け、その、
指一本すら動かさない
身体に様々な体位を
とらせては、飽きもせず
既に「子種」で充満した
子宮を犯し続けた。

……

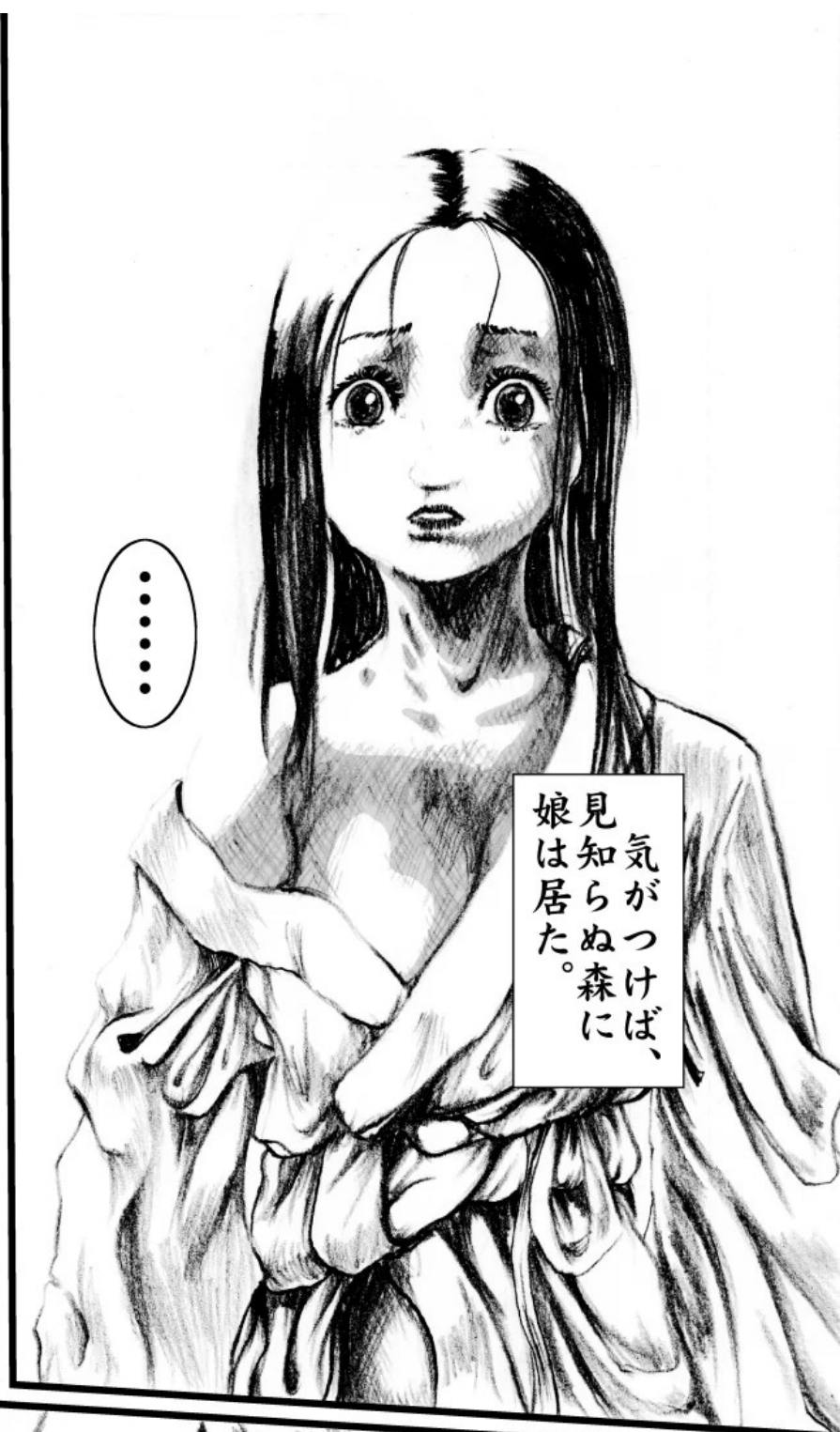
……



よく晴れた午後



娘は、呆然としながらも
着物の裾を正し、ふらふらと
覚束ない足取りながら、
森の脇を通る山道へと出た。



気がつけば、
見知らぬ森に
娘は居た。



ほんの数日で
見違える程に色香を
増した娘の身体を、
突然の変異が襲った。

どくんっ

びくんっ

はあ

どくんっ

溢れ出す程の
肉の欲求に娘の
深奥は熱く燃え、
触れもしないのに
女陰は獣のように
濡れて滾った。

どくんっ

はあ

はあ

はっ

あ……っ

思わず、
娘は膝をついた。

はあ



ぐちゅっ

はう……っ

ひるひなた
昼日向で女陰に
自ら深々と指を沈め
自慰にふける……。
乙女として恥ずべき、
あるまじき行為。



ああ……

哀しいまでのさだめ。
『山神』の花嫁は例外無く、
肉欲の虜^{とりこ}となってありと
あらゆる「雄」と交わる
事となる。
それは雄の精を喰らう
事で成長する、恐るべき
『山神』の子種が与える、
第二の責め苦と言えた。

自慰を見られ、思わず
裾を押さえる羞恥の心……。
それが残っている事が、娘に
とって幸せであるかどうか、
……それは誰にもわからない。

あ……っ

2008
4/29
新